

# わたしの京都

河野裕子

ながたに  
長谷八幡神社—左京区岩倉長谷町

「鳥居の内に家があるんですね」と言われたときはびっくりした。言われるまで気がつかなかったことである。なるほど確かにそうである。鳥居は内の近くに石と木と朱色の三つがあるが、鳥居の内と意識するのは石造りの大鳥居の内のことである。わたしの家から西へ二百メートルくらいの所に位置しているが、大きくたいへん立派な鳥居でいい目印になる。今でもそうだから、このあたりに家が立て込むまえの田んぼばかりの頃は、どこからでも見えたにちがいない。

わたしは何でも昔のことを見聞きするのが好きで、最寄りの本屋さんで『洛北 岩倉誌』という本を見つけて早速買って来た。これが

なかなか面白い。昔の岩倉のことが何でも書いてあるうえに写真を見て、へえーと驚くのがまた楽しい。昭和三十年の写真で見ると、鳥居のあるあたりは、少しの民家と立ち木があるばかりのまことにのどかな情景が広がっている。それは、東京オリンピックがあるまで日本中どこでも見られた田舎の景色で、とてもなつかしい。

鳥居に向かって一本の太い道がまっすぐに通っているが、これは競べ馬のための馬場であった。長谷八幡神社では毎年四月二十九日に行われていたが、戦争が始まり馬が徴用されてしまい、競べ馬どころではなくなってしまうらしい。

鳥居の横の萱葺きの家は風格のある家である。堅牢な門構えや牡丹が幾畝も咲く見事な庭に、いつも立ち止まって見とれてしまう。テレビドラマでこの家が映っているのを三度ばかり見たことがある。いつだったかは、鳥居の真ん中に八咫鏡のような鏡をセットして撮影していた。

今年の秋がくれば、今の家に引っ越してきてから五年になるが、引っ越した当座は驚くことが多かった。夜中に真つ暗な竹やぶの向こうからズンズンズンズンという地響きのような得体のしれない物音が近づいてくる。地霊が呻いているようで怖かったが、あとから考えると、それは十月十日の神幸祭前日の太

鼓の音なのだった。毎晩タヌキが出没するの  
も珍しかったが、この頃は昼間出くわしても  
平気になった。タヌキばかりかサルも集団も  
キツネも現れる。

四季の移りとともにあった暮らしの形とけ  
じめ。農耕民族日本人が何百年も続けてきた、  
しきたりや暮らしの習慣がこの家のまわりには  
色濃く残っているのを感じる。結婚して田  
舎の家を出てからのわたしは都会でばかり暮  
らしてきた。いわば浮き草のように各地を  
転々として、どこで暮らしてもその土地にそ  
れなりに馴染んで楽しかったと思う。けれど、  
長谷八幡の入り口の小さな灯籠に、毎晩蠟燭  
の火をつけに来て拜んでいる人をこんなに間  
近に見るような暮らしはしてこなかったよう  
な気がする。

一昨年は病気をして身辺不如意な日が続い  
た。歩くのもしんどかったが、大晦日の夜、  
長谷八幡神社の除夜祭に家族と出かけた。出  
かけたといっても、神社は三軒向こう、参道  
をいれても百メートルあるかないかの距離で

ある。参拝者は意外に少ない。「毎年、人の  
数が減ってねえ」と、木の根元ちかくに腰を  
おろした土地のおばあさんが話しかけてくる。  
齋庭には大きな木の根が勢いよく焚かれ、  
暗い神社の柱に音をたてながら火の粉をあげ  
ている。やがて神主さんが現れて祝詞をあげ  
る。白装束の氏子たちが順番に供物を捧げ持  
って、本殿の暗がりから一人ずつ現れる。氏  
子たちはまったく口をきかない。唇に櫛の葉  
を一枚はさんでいるからである。三方には大  
根、人参、蕪、青菜など畑の作物が載ってい  
る。氏神様への御礼の行事なのであろう。

暗きより影あらはれて火明かりに顔ひ  
とつづつ見え氏子歩み来 『歩く』

年の夜の不思議な時間が過ぎてゆく氏  
子ら順番に柏手を打つ 同

除夜祭が終わるところから人の数がふえはじ  
めた。歳旦祭が始まるのである。初詣での人  
々の行列が、焚き火の火明かりのなかに、不  
思議な陰影をつくりながら続く。朱の鳥居の

向こうからやってくる人たちの話し声もする。  
初詣での人の中には鶴見俊輔氏もおられた。  
氏は確か長谷八幡神社の氏子だったはずであ  
る。寒いなかでちよつと立ち話をする。「あ  
なた、病気をして顔がやさしくなりましたね」  
と言われる。そういえば、鶴見氏も病気の巢  
窟といつていいくらい、いろいろな病気をし  
てこられたことを本で読んだことがある。

いつかの折に、氏が「このあたりは歌枕の  
地だね、八塩の岡といつて紅葉の名所だね」  
と教えてくださったことがあり、恥入ったこ  
とがある。例の『洛北 岩倉誌』の図版をみ  
ていてはつと気がついたのだが、八塩の岡は  
わたしの家の裏にある小高い岡のことだった。  
今は竹やぶになっているが、藤原公任や西行  
もこの岡を詠んでいることに何ともいえない  
感慨がある。

いわくらのやしほ染めたるもみぢ葉を  
長谷川におしひたしたる

西行「夫木和歌集」

長谷八幡神社は千百年以上続いている古い  
神社である。その鳥居をくぐる度に千年の時  
間のなかに入っていくような、何かに守られ  
ているような不思議なつかしい気持になる。

(かわの・ゆうこ「塔」選者)